
悪徳

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪徳

【Nコード】

N2820G

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

バチカン。今法皇がなくなろうとしている時に密談を繰り返す一団があった。彼等は何を話しているのか。実際にローマ法皇即位にはこんな話がいつもあったようです。

第一章

悪徳

バチカンの奥深くで。今ある者達が密談を行っていた。彼等は光に包まれている筈のバチカンにおいて暗室に集まりそこで話しているのだった。

「もうすぐか？」

「そうだ、もうすぐだ」

お互いにそう話し合っている。しかし顔は見えずただ声だけが聞こえる。そうして彼等だけで話をしていた。暗い密室の中において話している内容は彼等の他には誰にも聞いてはいない。だがそれでも彼等は。誰かに聞かれるのを用心しているかのように小声で話す。その声で語り合っていた。

「もうすぐ崩御だな」

「そうか。いよいよだな」

「いよいよだ」

その言葉が確認される。彼等の中で。

「いよいよはじまるぞ。用意はいいか」

「既にできている」

「金だが」

「大丈夫だ。ドイツから調達してきた」

「そうか。それは何よりだ」

金のこととドイツが出て来て彼等の中で満足したような笑いが起こった。それは声にも出ており声そのものと嫌らしい笑いになっていた。

「やはりドイツを押さえておいたのは正解だったな」

「イタリアよりやり易い」

「確かに」

このことも確認される。

「スペインは修道院があまりにも五月蠅いからな」

「あそこはな。少し教化に身を入れ過ぎた」

「全くだ」

イタリアは多くの小国に別れその信仰もバチカンの実態を知っているから冷めたものもあった。スペインはその逆であまりにも信仰が強固であった。それは潔癖と表裏一体であった。本来はいいことなのだがどうやら彼等にとってはそうではないらしい。

「おかげで絞ることは難しい」

「しかもどの国も王権があまりにも強いな」

「だからだ。駄目だ」

こう結論付けるのだった。まだスペインが複数の国家に分かれていた時代のことだ。この国を一つにしたのはカステイーニャとアラゴンの合併でありそれを確固たるものにしたのは二人の娘ファナの息子でありハプスブルク家の血を引くカール一世である。

「王の周りにも修道院の者達が多いからな」

「フランスもそうだしな」

「だからドイツだ」

こう結論付けられた。

「やはり皇帝の権限が弱いしな」

「皇帝は月だ」

これは実際に法皇インノケンティウス三世の言った言葉だ。教皇の権勢が絶頂期にあった頃だ。この頃のバチカンはずっと絶対であった。

「そして教皇は太陽だ」

「月は太陽によって生かされるもの」

「それならばだ。やはり」

「幾ら絞ってもいい」

「そういうことだ」

笑みに邪悪なものも宿った。

「だからだ。ドイツは牝牛だ」

「そうだな。教会の牝牛だ」

実際にこう呼ばれて集中的に搾取されていたのだ。民を安んじらしめすのではなく塗炭の苦しみを与えていたのが当時の教会であった。

「牛は乳を出し飲ませるものだ」

「ならば。精一杯絞ってだな」

「その通りだ。金はできた」

やはりそこからであった。

「買収できる人間はもうわかつているか」

「うむ、既にな」

「何人か。わかっている」

「よし」

誰かがその言葉を聞いて会心の声をあげた。

「ならばいい。上出来だ」

「上出来か」

「何事も金だ」

教会にあるまじき言葉ではある。

「金だからな。まずはそれをばらまくぞ」

「わかった」

「枢機卿様もこう仰っておられる」

ここで枢機卿という言葉が出て来た。言うまでもなく教会の頂点にある法皇を補佐する立場にいる者達だ。その緋色の法衣の持つ富と名誉は一国の君主にも匹敵する。

「そうな。いいな」 6

「よし。ではこれをありったけばら撒くか」

「まずは野心のない枢機卿の方々にだな」

「野心のないか」

「その通りだ」

こう言われるのであった。

「その方々に金を渡してそれで票にするのだ」

「票か」

「票は金だ」

この言葉も出された。

「金で手に入れるものだからな」

「だからか」

「しかしだ」

「どうした？」

「大抵の野心のない枢機卿の方々はいい」

それはいいとしたのだった。だがまだそれでも問題が残っている。そのことをはっきりと告げた言葉であった。それが何かというと。

第二章

「金になびかない方もおられるぞ」

「そういえばバレンチ枢機卿は」

この枢機卿の名前が出て来た。

「清廉潔白な方だな」

「しかも法皇への野心もない」

そのことが話される。

「しかも意志の堅い方だ」

「あの方はどうされるのだ？」

「バレンチ枢機卿御自身はそうだな」

答えるその声は笑っていた。

「確かに。あの方はそうだ」

「だから買収は無理だぞ」

「どうするのだ？」

「何も騎士をそのまま倒す必要はあるまい」

くぐもった笑いと共に出された言葉であった。

「騎士をな。違うか？」

「というと？」

「一体？どうするのだ？」

「枢機卿には妹君がおられるな」

「ベアトリーチェ伯爵夫人だな」

「そうだ、ベアトリーチェ伯爵夫人だ」

その枢機卿の縁者の名前が出された。

「その方は今御主人が病に臥せておられる」

「ふむ、そうだったのか」

「それは気の毒なことだな」

「普通の薬では助からぬ」

このことも述べられた。

「しかしだ。バチカンの薬なら助かる」

「ふむ。ではその薬を御主人にお渡しするか」

「それで助かるな」

ただ助けるだけではない。彼等は話をしてもうそこまでわかつて話をしているのだった。この辺りは最早以心伝心であった。

「それで伯爵夫人の心を掴み」

「バレンチ枢機卿もか」

「枢機卿は妹君を誰よりも可愛がっておられる」
つまり肉親の情というわけである。

「それを使うのだ。どうだ」

「成程、そういうことか」

「これはいいな」

「他にも金ではなびかない枢機卿もおられるな」

「カターニヤ枢機卿もだな」

「あの方には美女だ」

女好きの聖職者なぞこの時代は幾らでもいた。中には半ば公認で子供を何人も持っている法皇さえいた。そういう時代だったのである。

「ナポリからとびきりの美女を用意させてある」

「ではそれを送り込んでだな」

「その通り」

今度は女であった。

「サレド枢機卿にはダイヤだ」

「よしっ」

「バザーニヤ枢機卿には馬だ。弟君に贈ってな」

「馬ならアラビアのものがいいな」

「既にトルコに商人を行かせてある」

一人が述べた。抜かりはここでもなかった。

「これで大体票は集められるが」

「しかしどうしてもなびきそうにないのもいるぞ」

「ロレンツ枢機卿だな」

「そう、ロレンツ枢機卿だ」

また新たな枢機卿の名が出された。

「あの方は修道院にずっとおられ潔癖極まる。女にも宝にも馬にも興味がない」

「しかも天涯孤独だ」

どうにもややこしい立場の人間であるらしい。

「あの方はどうされるのだ？」

「ましてや我々にも反対しているぞ。完全にな」

「ベッドだ」

また言葉が出された。

「ベッド!？」

「そうだ。枢機卿のベッドにこれを滲み込ませるのだ」

ここであるものが出されテーブルの上に置かれた。置かれた時に小さなコトリ、という音がした。その音はまるで死神の鈴を思わせるものがあつた。

「これをな」

「それをか」

「刺客を送ったり食べ物に滲み込ませるよりもいい」
声に剣呑な響きが込められていた。

「ずっとな」

「ふむ。ではそれを使うか」

「枢機卿は天国に行かれる」

言葉に邪悪なものが含まれてきていた。

第三章

「急にな」

「よし、それではだ」

「天国だな」

応えるその声にも邪なものが含まれてきていた。

「そうするか」

「では他の競争相手にもだな」

「マレンチーノ枢機卿にも使うか」

「ああ、あの枢機卿は若いし能力もある」

「しかも野心家だ。法皇の座も狙っているしな」

「完全に我々の敵だ」

政敵というわけであった。

「だからだ。彼にもだ」

「天国だな」

「その通りだ。しかし彼は用心深い」

「実にな」

言葉に忌々しげなものが宿る。それはそのマレンチーノ枢機卿に
対して向けられたものであった。

「若しそれが失敗したらだ」

「そういえばあの枢機卿はベッドを毎日変えているらしいぞ」

「眠るベッドをか」

「部屋も変えているらしい」

このことが話されるのだった。

「毎日な。違う部屋だという」

「当然だな」

それを聞いて闇の中にいる男のうちの一人が納得したように呟い
た。

「毎日同じ部屋なら天国に行きやすい」

「だからだ」

「そうだ。だからこそ毎日部屋を変えているな」

「面倒な話だな」

「何、それならそれでやり方がある」

しかしその一人はすぐにこう言うのであった。その声に邪惡なものが宿っていた。彼もまた、であった。

「それならな」

「剣か？」

「それとも橋が落ちるのか？」

橋という言葉が出た。

「以前のパルミエーリ伯爵の様に」

「あれは苦勞したがな」

パルミエーリ伯爵というところで出て来た言葉であった。

「事故に見せかけるのはな」

「そうだったな。あの時はまず馬車に工夫をして」

「うむ」

その時のこともまた語られるのであった。

「車輪が外れ易いようにしてな」

「そのうえで橋が崩れ落ち易いようにした」

実に周到であるようだ。

「それで落としたからな。だがそのかいがあったな」

「あれは誰も疑わなかった」

「今もな」

闇の中の声がそれぞれ勝ち誇ったような、それでいて陰慘な、決して表の世界には出ることのない陰湿な感じの声になっていた。

「それと同じだ」

「ではまた橋を落とすか？」

「それとも急に落馬してもらうか？手綱かあぶみを切っておいて」

「いや、あの枢機卿はやはり用心深い」

このことがあらためて語られるのであった。

「それも無理だ」

「近寄ることは無理か」

「しかしだ」

だがここで別の方法が語られるのであった。

「城の周りには行ける」

「城か」

「そう。そしてだ」

また闇の中の声に邪悪で剣呑なものが満ちた。

「その城に火だ」

「火か」

「そうだ。それは自然に起こる」

あくまでそういうことにしておくのだった。

「自然にな」

「不思議なこともあるものだな」

「全くだ」

わざととぼけた言葉であった。

「いきなり城が燃えるのか」

「偶然とは恐ろしいものだな」

「全ては神の御意志だ」

白々しいがわざと言っているから彼等にしろわかっている。

「これもまたな」

「そうだな。全ては神の御意志」

「何もかも」

他の者達もそれに合わせて白々しい言葉を出した。

「そういうことだな。そういえばあの枢機卿殿は領民には好かれていなかったな」

「ではそこに鼻薬を用意しておくか」

「もう一ついいプレゼントを彼等に贈ろう」

こうした言葉も出るのだった。

「よい領主をな。これでいい」

「そうだな。若し何かがあるうとも」

「彼等がこっそりとやってくれる」

「そういうことだ。そして」

「まだ何かあるか？」

「邪魔になりそうな方はまだおられるか？」

「宴の用意だ」

ここで急に話が変わった感じになった。それまでの邪悪な白々しさに満ちたものから急に楽しいものになったのだった。だが何故か宴という言葉にも隠微さが含まれていた。

第四章

「宴のな」

「宴のか」

「まずはローマだ」

ローマだというのである。

「市民達に馳走だ」

「ふむ、そうだな」

「彼等の支持もまた必要だからな」

「その通りだ。彼等を招こう」

ローマの市民達を宴に招くというのだった。

「それはバチカンの外でだ」

「外か」

「中でもまた行こう」

中についても語られるのだった。

「中は。各国の貴族達と」

「他の司教の方々にもだ」

「全ての支持が必要だからな」

言葉が念入りなものになっていた。

「だからだ。中でもだ」

「それはいいが」

「しかしだ」

中での宴については異論も出て来た。

「市民はともかく貴族だな、中は」

「そうだ」

「ただ馳走するだけでは支持は得られまい」

「そうだ。彼等は肥えている」

冷静にこのことが述べられた。

「ならば。ただ馳走するだけではな」

「あまり効果はないぞ」

「無論それも考えている」

冷徹な読みを感じさせる言葉であった。

「それはな」

「というところなのだ？」

「何を考えている？」

「狂宴だ」

冷徹な読みはすぐに消えてまた邪悪な笑みが言葉に含まれてきた。

「それを考えている」

「狂宴！？」

「何だそれは」

「意味がわからないが」

「女だ」

その邪悪な言葉はそれを指し示した。

「馳走に美酒に女だ」

「それ等を振舞うのか」

「無論馳走も美酒も外のものとは違う」

それについても述べられた。

「そのうえ女はローマ中の娼婦から集め」

「それもまた振舞うというのか」

「どうだ？これで」

「面白いな」

くぐもった笑いでの返事であった。

「そういうものもな。だが」

「だが。何だ？」

「バチカンの宴だな」

「そうだ」

答える方もくぐもった笑いになっている。彼等はお互いそこにある邪な心を隠してはいなかった。隠そうとしてもしてはいないのだった。

「バチカンでの宴だ」

「背徳だな」

バチカンには決してないとされているものだ。

「まさに。そうした狂宴はな」

「しかも十字架の前で行うというのはどうだ？」

「さらにいい」

声は他の者達にも及んだ。皆くぐもった笑いを浮かべ続けるのだ
った。

「尚更な。主の御前でそれはな」

「異教のようだ」

「だが異教ではない」

笑って否定されたのはこの場合異教だけではなかった。

「ここはあくまでバチカンなのだからな」

「では聖なる宴なのだな」

「そう。聖宴だ」

そういうことにされてしまった。

「バチカンにあるのだからな」

「それではその聖宴に呼ぶ方々も決めよう」

「そうだな。おおよその話はついた」

これまでの話で、ということである。

「それではだな」

「そうだ。まずはボルキアーノ公爵に」

「バカニーニ伯爵」

「それにレンツェ司教もだな」

「めばしい人物に各国の大使殿も呼んでおこう」

「うむ、そうするか」

こうして話が練られていった。程なくして枢機卿のうち何人かは
急死中には不慮の火事で若くして世を去ることになってしまった
者もいた。皆その非業の死に涙せずにいられなかったがここである
ことも囁かれるのであった。

第五章

「やはりな」

「うむ、そうだな」

「間違いない」

ひそひそと怪訝な声で眉を顰めさせて。そのうえでの密談の中で話されるのであった。

「教皇の座を狙ったばかりに」

「こういうことになるとはな」

こう囁かれるのだった。他にも妹婿を同僚に助けられた枢機卿がいた。その彼がある枢機卿を次期教皇に推挙した。それはまさに次の教皇を決めるコンクラベのさなかのことであった。

「ロベール枢機卿をですな」

「そうです」

そのバレンチ枢機卿はここでその同僚を次期教皇に推したのである。他の教皇達も多くはその言葉を聞いて目で頷くのであった。

「如何でしょうか。ロベール枢機卿では」

「そうですな」

「確かに」

その彼等は口々に彼の言葉に頷いてきた。

「それで宜しいかと」

「私もそう思います」

「では我々の間ではそれで宜しいでしょうか」

「それだけではありませんし」

「そうです」

枢機卿達はここでまた口々に言うのであった。

「ローマ市民達も何かあれば言っています」

「ロベール枢機卿を教皇にと」

こう言うのである。

「そしてイタリアの有力諸侯や司教まで」

「各国の大使までです。そうしたことを踏まえれば」

「ロベール枢機卿以外ありません」

まるで最初からその結論は決まっていたかのように。流れ作業にも似た速さで議論が進んでいく。その速さに慎重な議論を挟む者は誰もいなかった。

「では。そういうことで」

「決まりですな」

「確かに」

やはりここでも異論は出ないのであった。

「ロベール枢機卿で」

「決まりです」

こうしてそのロベール枢機卿なる人物が次期教皇になることが決定した。白衣の教皇が姿を現わした時ローマ市民達が戦闘に立ち彼を讃えるのだった。

「教皇様万歳！」

「バチカン万歳！」

教皇は微笑み彼等に応える。その彼等に対してすぐにパンに肉、それにワインが配られる。彼等はそれを飲み食いしさらに教皇を讃えるのだった。

「有り難うございます！」

「これぞマナ！」

こうまで言う者が出て来ていた。

「神が教皇様を通じて贈られたマナだ！」

「教皇様の恵みだ！」

彼等は今パンとワインに満ち足りて彼を崇めるのだった。教皇は満面の笑みで彼等を見届けた後で。そのうえで教皇の間に入るとそこに多くの神父達が控えていた。

「教皇様」

「何でしょうか」

表面は穏やかな言葉であつた。そしてその表情もまた。実に穏やかである。そうしたものを見ただけでは少なくとも神の代理人に相応しく見えはした。

その前に控える神父達もまた。だが彼等はその温和な顔でこう教皇に問うのであつた。

「宴ですが」

「聖宴ですね」

「はい、そうです」

「皆また待ち望んでおります」

「わかつています」

静かに微笑み彼等の言葉に応える教皇であつた。

「それもまた」

「それでは今宵も」

「あの宴を」

「ですが。今日はより趣向を凝らしましょう」

「趣向を？」

「そうです」

何故かここでその温和な笑みに邪なものが宿つた。本隊は相反するものである筈なのに何故かこの教皇の顔には並存しているのであつた。

「それを考えました」

「といたしますと」

「いつもの十字架の前での儀式ではないのですか？」

「それは変わりません」

これは否定しないのであつた。

第六章

「ですが」

「ですが？」

「アラビアからの香が手に入りましたね」

「あれですか」

「そう、あれです」

笑みの邪なものがさらに深まってきていた。

「そのうえであれを執り行いましょう」

「わかりました。それでは」

「用意はできていますね？」

「無論」

「それはもう既に」

神父達もまた邪な言葉で述べるのだった。

「できておりますので」

「では今宵」

「はい、今宵に」

最早邪なものに満ちた顔になっている顔で応える法皇であった。

「また」

「今宵はあの方々も来られるのですね」

「勿論です」

また応える法皇であった。

「呼んでありますね」

「はい、それもまた」

「招待状を」

「ならばいいです。それでは」

これでここでの話を終えた。そしてその夜。バチカンの礼拝堂において様々な者達が集まっていた。十字架にかけられている主の前に枢機卿や司教、各国の大使や貴族達が集まっている。中にはロー

マに古くからいる家の名門の子弟達さえいる。その彼等を前にして法皇は言うのであった。

「今宵は楽しむのです」

「今日もまたですね」

「主はそれを望んでおられます」

その主を前にしての言葉である。

「ですから」

「はい、それでは」

「そのように」

「さあ、はじめましょう」

早速部屋の中を妖しい煙が立ちこめる。既に礼拝堂の中には他では出ないような、胡椒さえふんだんに使われた馳走に美酒が出されている。皆煙の中でそれを味わいだした。

「今日は何か余計に」

「この煙のせいでしょうか」

「この煙こそ神の御力なのです」

こううそぶく法皇であった。

「人の心をより見せるものなのです」

「人の心を」

「そう。だからこそ」

この言葉を合図とするかのように部屋の左右の扉から裸の美女達が姿を現わしてきた。そうしてそこにいる者達に淫らな笑みを浮かべ抱きつくのであった。

「今こそ。主の前でこの世の喜びを讃えましょうぞ」

「はい、それでは」

「我々も」

皆その自分達に抱きついてきた美女をそれぞれ押し倒しその場で快楽に溺れた。そして法皇もまた。神に仕える誰もがこの狂気の宴を貪るのであった。

この時代の教会の腐敗は現代までも伝わりその呆れ果てた様子を

伝えている。この時の法皇ロドリド三世はその謀略や卑劣さで有名であり当時の腐敗の象徴とさえ言われている。その好色さと貪欲さもあまりにも有名であり今もなお良識ある聖職者達から反面教師とされている。法皇になるに至るまでの悪辣な謀略も歴史に残っている。だがそれでいて当時はローマの民衆に至るまで人気の高い法皇であった。その理由もまたわかっているが当時はそれが法皇になるまでは当然でありなってからも当然のことであったのだった。時代が時代とはいえ悪徳を極めた彼が生前は人気が高かったのは驚くべきことなのか呆れるべきことなのは。それを断言することは難しいが事実を述べることは容易い。今ここに彼が法皇に至るまでに行われた謀略とその狂乱の宴のことを書き留めておく。当時のバチカンとはこうしたものであるということを知って頂ければ幸いとするものである。

悪徳
完

2008・12・5

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2820g/>

悪徳

2010年10月8日15時04分発行